

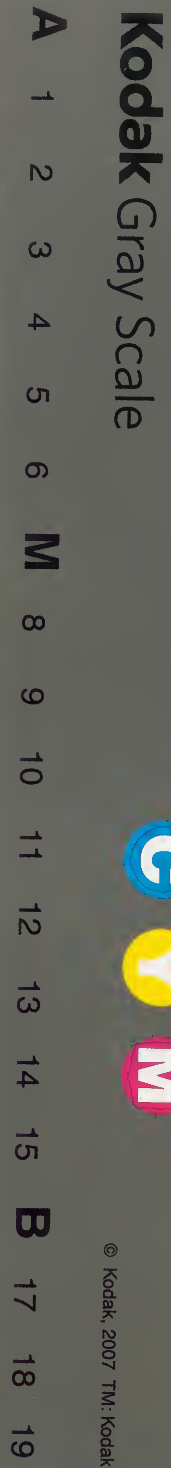
古事記傳

四十一

太政官文庫			
和書門	八五〇	九三〇	四九一
類	號	函	架
			冊

內閣文庫			
和書	八五〇	四九一	三七四
類	號	冊	函
			架

內閣文庫		
番號	和	8500
冊數	49 (46)	
函號	137	2



治天下之民莫如德
德者本也財者末也
外本而內末財竭而
民散夫財者君子之
所聚而小人之所聚
也君子之聚財取之
節用而散之與民
小人聚財取之無節
而散之與小人夫
君子之與小人猶
水與火也水勝火
火勝水君子之與
小人亦猶是也夫
君子之與小人猶
天之與地也天之
高而地之下君子
之尊而小人之卑
猶天之不可及也
猶地之不可測也
君子之不可欺也
猶天之不可及也
猶地之不可測也
君子之不可欺也

古事記傳四十一之卷

朝倉宮上卷官

本居宣長謹撰

明治九年購本

大長谷若建命坐長谷朝倉宮

治天下也。天皇娶大日下王之

妹若日下部王。又娶都夫良

意富美之女。韓比賣生御子白

カノミコトツギニイモワカタラシヒメノミコト
髮命。次妹若帶比賣命。二故爲カレシ

ラカノミコノミコトノミナシロトシテシラカベヲサダメタマヒ
白髮太子之御名代。定白髮部。

マタハツセベノトネリヲサダメタマヒ。マタカハセノトネリヲサダメ
又定長谷部舍人。又定河瀬舍

タマヒキ
人也。谷若建命坐身谷際舍人

大長谷若建命若建申以大御名ハ此ハ初テ出シ

○此、天皇后の漢様の御謚雄畧天皇申以。○長谷ハ

和名抄云大和國城上郡長谷ハツセ波都郷神名帳云同郡長

谷山口神社ハ所ヨ遠飛鳥宮段輕太子御哥コノ許母理

久能波都世能夜麻能此御段ノ長谷山口書紀繼躰卷

哥コノ昔母モ喇矩能リク能ノ躰都細能ハツ哥婆カ庾万葉ハノ一二十

隱口コ乃泊瀨山者云ハク云ハを始ハメテ卷ハクハ甚多ハク後

世の哥コを甚多ハク古ハク今ハモ名高ハキ地トナリ名義ハ未思

得レ安瀨ノ意ハ川上ハハ長谷ノ書ハ遠ハルハ此ノ國ハ中ハヨテハ此

地ノ上ハ瀨ノ意ハ川上ハハ長谷ノ書ハ遠ハルハ此ノ國ハ中ハヨテハ此

皇命有司設壇於泊瀨朝倉宮書紀云十一月壬子朔甲子天

姓氏録秦忌寸條云云大泊瀬雅武天皇御世云々役
諸秦氏構八丈大藏於宮側納其貢物故名其地曰長谷
朝倉宮是時始置大藏官負以酒為長官也宮號の
由是あり但書紀に依りきハ本あり此地名の如く
毛聞ゆいかゞ有けむ九そ朝倉也云地名處くあり
係稱名倭者師木登美豊朝倉曙立王也ある是ハ地名
ろ別よ由あれり齊明天皇の西国の行宮の号を朝倉
橋廣庭宮也云り九て朝也云ハいかなる義ふりあり
多かの熊野高倉下の故事に依りて祝て云るなりや
なりよく考ふは又和名抄に校倉阿世久はて此大
良也ある此名朝倉の轉也云り○大日下王上よ出○若日
宮ハ帝王編年記に城上郡磐坂谷也也あり大和志に
在黒崎岩坂二村間也云り○

下部王延佳本よ部字無きハさかちらよ削き毛上よ
出傳ハ五安康天皇大日下王の御許に根臣を遣して
此天皇の御為に此女王を聘賜りし事彼御段に見
ゆ傳四十の初○書紀履中卷よ次妃幡梭皇女生中蒂
心得文ろ水ハ此記に應神天皇の御子に幡日之若郎
女あり水若其よや少思子也毛かの幡日之若郎女
ハ此仁徳天皇の御子の紛也云る傳ありこを上よ云
る若日下王也書紀此御卷よ更名橘姫也ハ非る若此
紛也中蒂姫皇女ハ大日下王の妃なり其縁より紛
まよる賜ふ書紀にあり此若日下王を履中天皇の后也
なり賜ふ書紀にあり此若日下王を履中天皇の后也
蒂姫皇女の御母皇后ハ別女玉ふるはし○都夫良
意富美韓比賣共よ上よ出書紀清寧卷よ元年春正月

云々尊葛城韓媛為皇太夫人。○白髮命レラカノ九レ白髮レカの加カ
也。清言ナリ其證あり。万葉書紀清寧卷ニ白髮武廣レラカノ
十七ニ之路カ見ル也。○國押稚日本根子天皇大泊瀨幼武天皇第三子也母曰
葛城韓媛天皇生而白髮云々見ゆ大御名の由是な
也。○若帶比賣命御名義コトなり。○書紀云元
年春三月庚戌朔壬子立草香幡媛皇女為皇后オホキサキハ橘姫
是月立三妃元妃葛城圓大臣女曰韓媛生白髮武廣國
押稚日本根子天皇與稚足姫皇女更名橘幡是皇女侍
伊勢大神祠次有吉備上道臣女稚媛更名橘幡是皇女侍
男長曰磐城皇子少曰星川稚宮皇子見下次有春日和

珥ニ臣深目女曰童女君生春日大娘皇女更名高云々レ媛レ
の事七年の処ニ是歲吉備上道臣田狭云々磐城皇子此記ミも近飛鳥宮段
よ石木王也あり是なるは春日大娘皇女ハ此記ミ
毛廣高宮段ニ天皇娶大長谷若建天皇之御子春日大
郎女云々也あり此コトハ漏ヒり。○白髮太子書紀ニ
二十二年春正月己酉朔以白髮皇子為皇太子。○御名
代上ニ見ゆ傳五ノ葉。○白髮部の事ハ上の御名代ハ此
よ云るが如し。孝德紀ニ白髮部連天武紀ニ白髮部造
なり云姓モ見ゆ續紀ハニ改姓白髮部ヲ為真髮部ト也
あり。姓氏録ニ。○長谷部舍人ハ天皇の大御名ニ觸ル故
真髮部見ゆ。

姓氏録云長谷部造也云姓も見えたり。書紀武烈卷云。依テ天皇舊例置小泊瀬舍人使ヲ為代號ヲ萬歲難忘カ彼ノ天皇カの大御名ノ舍人の事ハ上ニ見ゆ。傳ハ三ノの河瀬舍人カ代ナり。書紀又十一年夏五月近江國栗太郡言白鷺鷄居于谷上濱カ因詔置川瀬舍人ヲ也コ。此ハ世ニ希見シき事あり。故ニ後世ニ語傳テ予ニ云フ。其ハ取テハ河瀬也ノのみ号ニ負セて遺シ賜テ予ニ也ナり。ゆれハ予ノさスる由ヲぞシめりハ師ハ川ノ魚ヲ守ル人ヲ云フ也ナ。此ハ又ハ舍人ノもナ由ナ。天武紀云川瀬舍人造也云姓も見ゆ。姓氏録云川瀬造也いふ所也。

コノ三ヨニクレビトマキワタリキツソノクレビトヲクレハラニ
此時吳人參渡來其吳人安置
 於吳原故號其地謂吳原也。

此時の中卷明宮段ニ此ノ之御世云くナ。唐國の内ノ國名なり。其王ハ昔唐國漢代の後ニ魏吳蜀也。然訓シ。吳人ハ唐國の内ノ國名なり。其王ハ昔唐國漢代の後ニ魏吳蜀也。分テ是ノ地ヲ三國ニ分テ也。其後又南朝北朝ニ分テ也。跡ニ北朝ハ此ノ天皇の御代ニ也。其南北朝ノカ。

北史

倭もて吳の事云々... 北朝を南朝を吳の事云々... 漢の事云々... 皇の御世の事云々... 其由傳云々... 吳國の事云々... 八年吳國朝貢又此天皇六年吳國遣使貢獻云々... かくて此度參來する吳人書紀よハ吳國使也云々

毛實又彼南國王より奉る使ハ非ハ例の韓國... 吳津孫神社云々あり... 秋九月身狹村主清將吳所獻... 年夏四月身狹村主青與檜隈民使博德出使于吳十四... 年春正月身狹村主清等共吳國使將吳所獻手末才伎

アヤハトリクレハ、リニタキヌ、ヒエヒメオトヒメララ、ゲマ、スミノエノ
 漢織吳織及衣縫兄媛弟媛等泊於住吉津是月為吳客
トツル
 道通磯齒津路名吳坂三月命臣連迎吳使即安置吳人
ヒノクニヌニカレ
 於檜隈野因名吳原以衣縫兄媛奉大三輪神以弟媛為
アヤノキヌ、ヒト
 漢衣縫部也漢織吳織衣縫是飛鳥衣縫部伊勢衣縫之
オヤナリ
 先也一度なり一が年二の違ひ二て紛ひ二て二度一記さ
オホキサキ
 初ハジメ大后坐日下之時自日下之
ミ
 直越道幸行河内爾登山望

ミシセシレバ
 國內者有上堅魚作舎屋之家
スメラミコト
 天皇令問其家云其上堅魚作
タカイソトトハシメタマヒシカバ
 舎者誰家答白志幾之大縣主
マラレキコ、ニ
 家爾天皇詔者奴乎已家似天
ミアラカニニテツクレリトノリタマヒテ
 皇之御舎而造即遣人令燒其

タマフトキニソノオホアガタヌシオチカレコミテノミマヲサク
家之時。其大縣主懼畏。誓首白
奴有者。隨奴不覺而過作甚畏。
故獻能美之御幣物。能美二字以音布
繫白犬。著鈴而已。族名謂腰佩
人。令取犬繩以獻上。故令止其

著火即幸行。其若日下部王之
許。賜入其犬。令詔是物者。今日
得道之奇物。故都麻杼比。此四字以
音之物云而賜入也。於是若日
下部王。令奏天皇。背日幸行之

事甚恐。故已直參上而仕奉。是
コトイトカレコシカレカノレタニニキノボリテツカヘマツラムトマラサレメタマヒキコ、ラ
 モテミヤニカヘリノボリマストキニソノヤマノサカノウヘニ
 以還上坐於宮之時。行立其山
ユキタ、シテウタヒタマハク
 之坂上。歌曰。又佐加辨能許知
ノヤマトタ、ミコモヘグリ
 能夜麻登。多多美許母幣具理
ノヤマノコチゴチノヤマノ
 能夜麻能。許知基知能。夜麻能

賀比爾。多知邪加由流。波毘呂
カヒルニタチザカユルハヒロ
 又麻加斯。母登爾波。伊又美陀
クマカシモトニハイクミダ
 氣淤斐須惠幣爾波。多斯美陀
ケオヒスエヘニハタシミダ
 氣淤斐。伊又美陀氣。伊又美波
ケオヒイクミダケイイクミハ
 涅受。多斯美陀氣。多斯爾波韋
ネズタシミダケタシニハキ

泥受能知母久美泥牟曾能淤
 母比豆麻阿波禮即令持此歌
 而返使也

テカヘレノカハレキ
 大后ハ若日下部王あり書紀ニ元年春三月立草香幡
 梭姫皇女為皇后也云云是なり○日下ハ河内國河内
 郡あり今も日下村あり伊駒山の西方あり
白檮原宮
 之蓼津王垣宮段又日下之高津池なり也あふハ
 和泉國ありて別なり其由彼處くよ云るが如し地名の

サガカ
 義詳あり交暗坂今時暗か少峠云を以て思予若くハ
 此を省けるなり日下也書由毛詳サガカなり次世ハ波都
云佐伎久佐を三枝也書とごひ由あり修接又此
 地名暗坂の意あり其を日下也書ハ日の下也暗坂也
 之れ此を以てあやな考修し師ハ低坂坂也
 下也書るあや云甚物遠し云訓を借て坂を
 紀ハ草香也書れ九て彼紀ハ地名なり字多
 之ハ舊き依て新又改て書姓氏録日下部宿
 祿也此地より出即河内國も日下連日下部連
 なる移ありはて御兄の大日下王此大后共此地も住
 坐あり故も御名も負給子るなり○之時の之字舊印
 本又一本なり也也カケ作ふハ誤あり今ハ真福寺本延

佳本又一本なぞ又依まら。○日下之直越道ハ倭の平
群郡より伊駒山の内南を越て河内國不至也。若江郡
難波不下の道ありて今世は暗峠也云是なり。此暗峠を万葉よいはゆる立田山小鞍嶺あり也云ハ非なり。加の小鞍嶺ハ龍野越のり也な
嶺あり也云ハ非なり。加の小鞍嶺ハ龍野越のり也な
正さして今の日下村ハ此道より非也。北方あり也
も久佐加也云名ハ此坂より出て古ハ此坂のり也
ふも日下也云云け多。さて此暗峠の道今世も大
坂よ下る道不志也。津國東生郡なる深。此道近き故
江也云也。不至大坂不ハ至るあり。直越也ハ云なり。書紀神武卷不乃還更欲東踰膽駒山
而入中州也。何れも此道のり也なり。次文よハ孔舎衛
は久佐加也云ハも也。久佐惠邪加。万葉六不超草香山
の畧かりとる名あり也。あは多。万葉六不超草香山
神社忌寸老麻呂作歌二首難波方潮干乃奈凝委曲見

名云く直超乃此徑尔師互押照哉難波乃海跡名附家
良思裳此二首日下山の坂路より見ハ十五不草香山
歌忍照難波乎過而打靡草香乃山乎暮晚尔吾越来者
云くなぞあり。直越也云く也ハ同十二三十不磐城山
直越来益十七四十不之乎路可良多太古要久礼婆な
ぞ也あり。○幸行河内ハ若日下部王の坐日下不天皇
の幸行次あり。○山上ハ日下山の上なり。○望國內ハ
久尔美志世礼婆也訓修し。高處あり國內を見渡次之
古不國見也云也。万葉一七不天乃香具山騰立國見乎
為者又十九高殿乎高知座而上立國見乎為波三三十不

式大嘗 祭 亦も如此見えし。搏風ハキドハ千木チキなり延喜大神

宮儀式帳亦正殿一區云く堅魚木十枚 長各七尺徑一尺七寸 材

木別端ゴトニシ以金饒ニギハヤヒ也あり。此物後世亦ハく神の宮

亦の亦有き也。上代亦ハ然らば此の事を見せし天

皇此御殿亦も有し。加て此大縣主の家亦是を

上アゲしを咎免給するを思す。此物を置し天皇の御

殿此亦亦して。玉タマとち此宮亦は如何亦ありけり。多知ら

亦准らずて尊み奉る。臣又民の家亦ハ置る也。加なる

事多けり。論コトなり。臣又民の家亦ハ置る也。加なる

はゆし定ら。將置ハタる也。臣民の家可ておし。修せし

る也。是を置るを咎。賜亦ハ非で。其造りば亦置る也。亦異ある

を此ハ 臣の家ミコノイヘの堅魚木の 天皇の御殿ミコノミヤの亦似し。状

なる故亦咎賜する。若然らば天皇の御殿ミコノミヤのハ臣此

家の也ハ甚イタく異ある状シマ也。此御世ミコヨのころ

や。天皇の宮ミヤなるハ。莊シマ穢ケガレくありて上代ウヘノヨの形

なからに。此物コトの造状ツクリカタも異あるありけり。其

造ツクリも亦咎賜アガヒせし。此文コト上アゲハ尋常コトツネなら

亦高く莊シマく亦造ツクリする也。云亦て。上アゲ云言コトを重く

見修ミツき。將ハタ上アゲハ置ツクるを云て。似ニ天皇ミコ之御舍ミコノミヤ而造ツクリ也

云亦造ツクリは亦異ある意ハ有る。此物コトを置ツクる也。加

の異ある也。上アゲハ置ツクる也。又造ツクリも亦。此ハ

ふいかにたて目ふく故ふよく現存のゆけ事。○其
上の其ハ如能也訓修也。阿能也云意あり。○答白の白
字諸本ふ曰也あり。今ハ真福寺本ふ依也あり。○志幾之
大縣主志幾ハ和名抄ハ河内國志紀岐郡之なり。志
紀郷也あり。然此地の事ハ中卷倭建命段ハ出て彼
処云云あり。傳九のハ此大縣主ハ姓氏録河内國神
別ハ大縣主云姓ありて天津彦根命之後也也あり
是なる修ハ大縣主云例ハ中卷伊邪河宮段ハ且波
大縣主云あり。大也云例多也彼処云云あり。傳七二の
さて又師休縣主云二流ありて。一ハ饒速日命の後

此氏の事ハ中卷高岡宮段一ハ神ハ井耳命の後なる
傳七二の二葉委云云あり。一ハ神ハ井耳命の後なる
字若此二流の内多也あり。若然らば神ハ井耳
命の後の方あり。修ハ彼饒速日命の後あり。ハ大和の
はハ本より河内の其ハ姓氏録河内國皇別志紀縣主
志幾あり。出也。其ハ姓ハ井耳命の後なる
多朝臣同祖神ハ井耳命之後也。河内國志紀首志紀縣主
同祖云云也。是あり。又右京皇別志紀首云云。和泉
也。同祖云云也。河内國志紀郡人志紀縣主貞成同
福主同福依等賜姓。宿祢即改本居隸元京職神ハ
井耳命之後與多朝臣同祖也。右の外ハ姓氏録ハ大和
別志貴縣主なり。ハ其の修ハ神名帳ハ河内國志紀郡
饒速日命の後の方あり。

五十葉 ○奴有者ハ、奴あれぢなり。漢の城、那、礼、婆、ハ、尔、阿、礼、
一、那、理、ハ、尔、奴、ハ、王、尔、對、予、て、云、臣、あり、漢、文、よ、及、め、く、
阿、理、なり、奴、ハ、王、尔、對、予、て、云、臣、あり、漢、文、よ、及、め、く、
あり、異、○隨、奴、ハ、夜、都、古、那、賀、良、也、訓、治、し、奴、なる、可、く、
尔、也、云、意、なり、隨、ハ、天、皇、を、神、隨、也、申、次、又、同、じ、万、葉、二、
三、十、丁、尔、皇、子、隨、也、也、あり、○不、覺、而、也、ハ、王、ハ、貴、ら、ん、バ、
四、丁、尔、皇、子、隨、也、也、あり、○不、覺、而、也、ハ、王、ハ、貴、ら、ん、バ、
貴、き、ゆ、く、に、覺、也、ある、を、臣、ハ、賤、け、ん、バ、賤、き、あ、る、尔、如、
此、る、差、別、堅、魚、の、を、も、覺、ら、ん、で、也、云、あり、○甚、畏、の、甚、
字、を、其、也、作、る、ハ、誤、なり、今、ハ、真、福、寺、本、尔、依、ま、り、○能、
美、之、御、幣、物、能、美、て、ふ、言、の、意、ハ、彼、上、卷、ある、誓、首、白、の、
下、尔、云、也、御、幣、物、ハ、韋、夜、士、理、也、訓、治、し、其、由、ハ、中、卷、訶、

志、北、宮、殿、尔、献、易、名、之、幣、也、ある、也、傳、一、の、尔、云、る、が、
如、也、又、穴、穗、宮、殿、也、為、其、妹、之、礼、物、云、也、ある、也、傳、四、
葉、也、も、考、合、次、信、也、此、ハ、御、字、あり、ぞ、ミ、テ、グ、ラ、也、訓、治、
ハ、天、皇、尔、献、る、物、なる、故、又、漆、と、る、ある、也、然、ら、ん、じ、御、字、
又、師、ハ、訓、也、訓、治、し、れ、也、い、か、い、也、聞、勿、書、紀、允、恭、
卷、後、玉、田、宿、祢、則、畏、者、事、以、馬、一、匹、授、吾、襲、為、礼、幣、也、
礼、幣、也、也、也、ヤ、ジ、リ、也、訓、治、し、但、此、ハ、二、也、○布、繫、白、
犬、ハ、白、犬、尔、奴、能、乎、加、氣、豆、也、訓、治、し、繫、ハ、字、書、尔、繫、也、
豆、也、訓、治、し、ハ、犬、を、絆、ぐ、料、の、布、よ、ハ、非、也、絆、さ、し、る、繩、
糸、衣、を、著、せ、し、る、如、く、又、布、を、身、尔、纏、ひ、し、る、ある、也、
ツ、ナ、グ、也、訓、治、し、也、犬、ハ、布、を、也、訓、治、し、き、あり、犬、を、也、ハ、訓、

陰加^ク交^ニ繫^ス字^ヲを^シ毛^ニ書^ル故^ハ纏^ヒて^結固^カむ^ルが^事な^らず
 多^クし^テ此^ノ字^ハ混^チみ^テ繫^ス絆^ルげ^ルる^{コト}勿^ク思^ハひ^まが^可す^{コト}
 犬^ハ和^名抄^ル兼^名苑^云犬^一名^在尔^雅集^注云^犬子
 也^和名^惠沼^又與^犬同^也あり^此ハ^心得^ぬ記^しけ^りな
 猶^ノ下^ルの^吳舉^スる^ハハ^又古^{ヨリ}伊^奴也^云こ
 そ^正し^りれ^其を^おき^て惠^沼ハ^いか^ハ此^ハ指^ノ和^名
 又^與犬^同也^和名^まま^らは^しと^さて^此献^スる^犬ハ^下ル^奇物^也あ^れ
 尋^常なる^ハハ^非で^殊ニ^勝ま^り犬^ハ速^物也^を
 能^美の^幣物^なら^ど然^ある^法き^りざ^らり[○]著^ツ
 鈴^古ハ^凡て^物ニ^鈴を^著る^{コト}多^かめ^し中^ル犬^あぞ
 に^著る^{コト}今^世も^甚古^き事^{なり}け^り○^族
 八^書紀^神代^卷ニ^訓注^ル宇^我邏^也有^るニ^依て^訓注^シ

此^訓注^ニ依^ル宇^賀良^夜賀^良波^良賀^良な^ぞ皆^賀
 を^濁る^法き^言なり^登母^賀良^ハ今^も濁^てり^可め^万葉
 三^五十^四丁^ノ親^族兄^弟此^親族^今本^ニヤ^カラ^シ訓^注○^腰佩
 續^紀廿^五ノ^船連^腰佩^也云^同名^ノ人^見む^らり[○]若^日
 下^部王^真福^寺本^延佳^本○^賜入^入ハ^奉を^奉入^也也^あ
 万^葉二^ノ奉^入哥^祝詞^式ニ^齋内^親王^奉入^時天^長五
 年^宣命^ル大^神御^杖代^止之^皇奉^入多^前三^代実^録此
 進^入流^入也^同心^休可^ニ聞^ゆ又^奉出^也也^{あり}奉^出
 上^卷傳^十六^ノさ^て此^入字^ハ別^小讀^まず^もあ^る法
 廿^六葉^ニ出^せめ^さて^此入^字ハ^別小^讀ま^ずも^ある^法
 き^かも^も思^ふ可^也女^王の^御許^ニ賜^ふな^らば^少し^尊
 後^ノ言^ノ如^ク聞^ゆれ^を字^比随^小訓^也今^世の^言ニ
 入^贈入^な書^入も^少尊^み又^次の^令詔^令奏^也有^る令
 言^ハて^同意^ニ聞^ゆ又^次の^令詔^令奏^也有^る令

てよ言を以思ふべ此時天皇未の^一女王宮内入^リ坐^サ次^ニ
外又坐ての事ある故は内亦入^ル意^ハ小^シ也^ナある^レ法^ト
右の奉入毛入^ル意^ハある^レ何^レき^レ可^シ也^ナ伊^ハ礼^ト也^ナ訓^ス
受^ル方^ノ言^ハあ^リれ^ド○奇^ノ物^ハハ^ハ物^ト也^ナ訓^ス法^ト也^ナス^レ
師^ノ米^豆良^志伎^母能^也訓^ス宜^レ也^ナお^ハゆ^レ靈^異
記^スも^ハ奇^ノ先^ニ終^ルし^ク又^ハ云^フ阿^也也^ナ支^ス此^ノ言^ハ書^紀神^功
卷^ノ云^ク皇^后曰^ク希^見物^也希^見此^ノ云^フ梅^豆邏^志履^中卷^ノ
希^有崇^峻卷^ノ爰^有萬^養白^犬云^ク此^ノ犬^ハ世^所希^聞萬^人
名^ヲ萬^葉八^十三^丁希^持見^十二^十一^丁廿^四丁^也如^カ
此^ノあり^十六^三丁^目頼^志久^な也^{あり}此^ノ字^ハ異^ナ全^ク

希見^ル都^麻杼^比之^物麻^字諸^本摩^也作^少今^ハ真^福
同^シ毛^可き^を多^ク萬^葉三^十四^丁倭^文幡^乃帶^解替^而廬^屋立^キ
妻^向為^家武^冠辞^考少^セや^とて^此説^ハり^ろし^四三^十
你^孀向^尔十^六丁^尔妻^向迹^十八^三丁^尔氣^奈我^伎古^良
何^都麻^度比^能欲^曾十^九六^丁尔^玉刺^壽毛^須底^互相^争
尔^孀向^為家^苗な^どあり^物ハ^婢次^也を^贈る^物あり[○]
令^奏ハ^此時^天皇^の御^ぎ此^宮の^内尔^ハ入^坐て^外尔^坐
坐^ク次^間な^れを^人を^出志^を奏^さし^免賜^ふあり^故令^シ
云^め上^の令^詔も^然なり^又ハ^殿の^内尔^ハ入^賜ひ^な
を^隔て^くあ^もあり[○]昔^日ハ^比尔^曾牟^伎且^也訓^法
し^其も^令の^意ハ^同じ[○]昔^日ハ^比尔^曾牟^伎且^也訓^法

し曾年久ハ背向なり東ある倭より西なる河内牙幸
行次ハ東より出る日を背後ふ志賜小由形り中巻白
檮原宮段ル向日而戦不良云々背負日以撃也ある類
あて其義ハ彼少ハ表裏なり。彼ハ敵也戦ふなりを日
彼処云ふ如くなるを。後ふし賜小なるハ彼も此
此ハ背違ふ義なるハあり。後ふし賜小なるハ彼も此
毛同じなるながら事依て如此順とも逆ともある
那也。○已直参上直ハ仕奉牙係りて。参上牙係りて天
皇ハ河内牙幸行次を深く志て京の大官ル坐くな
がら直ル娶賜小候く参上て仕奉むの意あり。○此間
ル弁能誰知能の五字ある本ハ誤あり其ハ次なる御

哥の初二句の中此御詞の紛ひて此処ル入らるな
了。誰字ハ許を又。○還上坐於官官ハ倭の大官なり。さ
で大御哥を合せて此段を考ふる此天皇の此女王の
御許ル通坐こ中人是初ルをありけ多を此度ハ右此
恐みよ因て御合坐て徒ル還坐りあり。ゆてかく日
尔背向幸行次を深く恐む賜するハ誓の始な
り此が故あり。凡て何やなく西方より行を恐むはさふ
り終も然慎み敢小候。そをかく此天皇ハはがかり健く
荒き御心ル坐ふよかく此女王の御諫ル徒ひて還坐
しを思ふをよしく思ふ候し古人の日ル背向事を恐みし

從出立有不盡能高嶺者。久老云。甲斐國の此方なり。駿九
二十。白雲乃立田山乎。云。許智期智乃花之盛尔。ふ
一。丁。白雲乃立田山乎。云。許智期智乃花之盛尔。ふ
河。皆然。め。さ。て。此。ハ。此。の。日。下。部。山。々。彼。方。の。平。群。山。
也。各。其。此。方。あり。又。日。下。山。の。内。の。彼。此。平。群。山。の。内。
ぞ。な。不。然。○。夜。麻。能。賀。比。尔。ハ。山。之。峽。尔。なり。賀。字。ハ。必。
よ。ハ。非。じ。○。夜。麻。能。賀。比。尔。ハ。山。之。峽。尔。なり。賀。字。ハ。必。
大方記中假字清濁混じりて思ひて字し誤りなる
毛なく賀加ふと同じく思ひて字し誤りなる
し。和名抄考声切韻云。峽。山。間。陝。處。也。俗。云。山。乃。加。比。
○。多。知。邪。加。由。流。ハ。邪。を。濁。る。ハ。古。の。音。便。な。立。榮。ゆ。る
なり。書紀仁德卷大后御哥尔箇波區葎珥多知瑳箇踰
屢。毛。毛。多。羅。儒。柳。素。麼。能。紀。破。○。波。毘。呂。久。麻。加。斯。ハ。葉

廣久麻白禱あて中卷玉垣宮段尔出。傳廿五。○。母。登。尔。
波ハ。本。尔。者。なり。下。方。を。云。契。冲。ガ。後。の。須。惠。幣。尔。准。ら
幣。字。あ。り。て。本。边。あ。ハ。な。る。後。の。須。惠。幣。尔。准。ら
言。を。二。と。び。云。尔。始。し。替。て。云。る。也。古。哥。比。然。ら。文。同。○
伊。久。美。陀。氣。淤。斐。ハ。伊。ハ。伊。理。の。理。を。省。け。る。なり。久。美
ハ。師。説。尔。久。麻。加。斯。の。久。麻。也。伊。理。し。と。て。葉。の。繁。け。れ
ば。隱。記。竹。也。云。を。約。免。て。久。美。竹。也。云。ふ。也。河。り。冠。辞
次。竹。條。尔。見。ゆ。其。説。の。中。あ。り。と。久。米。也。云。る。考。内
を。も。例。に。引。き。て。御。穂。の。意。なり。又。伊。を。發。語。な。り。伊。云。
の。三。穂。牙。係。れ。り。御。穂。の。意。なり。又。伊。を。發。語。な。り。伊。云。
の。頭。尔。置。る。例。な。し。此。の。久。美。ハ。本。ハ。用。言。に。限。ま。り。伊。云。
美。竹。也。云。ふ。也。ハ。躰。言。な。り。然。る。也。伊。云。伊。云。伊。云。
置。る。也。ハ。又。思。ふ。物。の。彼。也。此。也。一。尔。相。交。は。る。意。尔

毛阿ふ信し。經云名も糸を相
交りしるよしなり。これハ伊久美竹ハ葉
の茂く志て。彼此相入交り合するよしなる信し。俗言
事の彼此を繁く雜り合を入りしるよし云も同言なり。契
沖ガ。ゆと美竹ハ。竹の名なり。ゆと美竹ハ。書紀繼躰卷哥
種の竹の名ハ。非交。ゆ斐ハ。生なり。書紀繼躰卷哥
者志げきるよしなり。○須惠幣。尔波ハ。真福寺本ハ。未
ふ。以矩美娜。余囊。閑。○幣。清音。さて此。本末ハ。山之峽の
方ハ。者あり。上方を云。幣。清音。さて此。本末ハ。山之峽の
下。方上。方を云なり。熊。白檮の下。方。其。由ハ。下。云。○多
斯。美。陀。氣。淤。斐。ハ。師。説。ふ。立。繁。竹。生。なり。ゆ。阿。ゆ。冠。辞。考
條。よ。立。ハ。生。立。る。ゆ。阿。と。云。る。あ。て。万。葉。一。二。十。三。丁。尔。春。山
見。ゆ。立。ハ。生。立。る。ゆ。阿。と。云。る。あ。て。万。葉。一。二。十。三。丁。尔。春。山
跡。之。美。佐。備。立。有。な。る。ゆ。阿。と。云。る。あ。て。万。葉。一。二。十。三。丁。尔。春。山
立。榮。の。立。を。同。じ。契。沖。ガ

竹を竹の名なり。ゆて上の伊久美竹也此也二種ハ
非交共ふゆ凡の竹の類ある字かく二つに分て云ハ
古歌ハ此類多也。万葉ニ秋山下部類妹奈用竹乃騰
ハあり。一人。○伊久美陀氣上。これいづみだけおひハ
此御句を詔ひしゆ凡の序。此御句ハ次の御句を詔は
多。ゆ阿の序あり。○伊久美波。泥受。美の下ニ陀字ある
ゆめて御まきるものなり。今ハ伊久美の意上お同じ師
真福寺本。延佳本。およむ。今ハ伊久美の意上お同じ師
説もてハ。籠。少。寝。る。なり。今。一。つ。の。己。が。考。ふ。あ。る。ゆ。阿。と。云。る。あ。て。万。葉。一。二。十。三。丁。尔。春。山
夫。婦。一。つ。交。り。寝。る。あり。何。事。も。志。て。も。伊。久。美。入。なり。
籠。少。な。る。ゆ。阿。と。云。る。あ。て。万。葉。一。二。十。三。丁。尔。春。山
夫。婦。互。に。躰。を。入。る。交。り。寝。る。あり。何。事。も。志。て。も。伊。久。美。入。なり。
夫。婦。互。に。躰。を。入。る。交。り。寝。る。あり。何。事。も。志。て。も。伊。久。美。入。なり。

契沖云神代紀云相與を久美度也訓り伊ハ發語
あり。伊ハ度也通波ハ相與者不寢る。若ハ陀ハ衍文
あり。與者不寢る云ハ大凡ハ違上卷久美度迹興
はさきやも詞の編なれ意違り。傳四の○多斯美陀氣序の由
而也ある処考合波修し。傳三葉○多斯美陀氣序の由
伊久美陀氣お同じ。○多斯美陀氣序の由。契沖慥おハ
不率宿なりや云るが如し。遠飛鳥宮段太子御哥お多
志陀志尔韋泥互牟能知波也。ある処お云り考合波修
し。傳九の○能知母久美泥牟ハ後也久美將寢あり。
久美の意上お云るが如し。此度ハ得逢見えて空く還
波也。又後お逢てむや詔おなり。後を今也。今也。今也。
お云也ハ異あり。此ハ俗。此御哥上。件の趣も。二
言又重ぬてや云意なり。

の竹は矣用あめて。葉廣久麻白檮ハ無用なる如くな
り。伊久美竹ハ伊久美を詔ハ多料多斯美竹ハ多
斯尔を詔ハ多料あり。白檮ハ下お兼くるこ
ろ。よく思可ハ然ら。其ハ白檮を葉稠く入交りて
繁立る。ら竹や同じ状ある物なり。伊久美波泥
云多斯尔也云。竹のみ。意ハ白檮より毛兼り。又
山之峽ハ立栄る也云也。白檮のみ。竹を係り。此れ
げ凡の意を直お云ハ山之峽の下方上方お生て立
繁栄えて。伊理久美。白檮竹也。然るも白檮
を離して別お詔ひ。又山の峽を本末を也別お詔
するなり。御詞の終るも。し。か。ら。る。如くあれ也。

毛如此^{カク}は^カ可^カに^カ言^カを^カ参^カ差^カあ^カして^カ連^カね^カら^カる^カ此^カ髪^カ髻^カなる
も歌^カの^カ製^カめ^カを^カて^カ古^カの^カ例^カ多^カく^カ後^カ世^カの^カも^カか^カの^カ係^カ類^カ
多^カく^カあ^カる^カを^カや^カなり^カよく^カせ^カら^カん^カ紛^カひ^カぬ^カ信^カし^カ師^カ云^カ久^カ麻^カ
英^カ賜^カ予^カふ^カハ^カ山^カの^カ本^カ未^カふ^カ竹^カの^カ生^カら^カる^カ子^カ詔^カハ^カ多^カく^カあ^カる^カ
其^カ中^カの^カ峽^カふ^カあ^カる^カ物^カを^カ詔^カ予^カる^カの^カみ^カなり^カ云^カゆ^カら^カる^カ
は^カ上^カ件^カの^カ意^カを^カ得^カら^カぬ^カさ^カ○^カ曾^カ能^カ淤^カ母^カ比^カ豆^カ麻^カハ^カ其^カ思^カ毒^カ
り^カし^カ加^カら^カ此^カ強^カ説^カあり^カ○^カ阿^カ波^カ礼^カハ^カ何^カ怜^カなり^カ遠^カ飛^カ鳥^カ宮^カ段^カ輕^カ太^カ子^カ御^カ哥^カふ^カ
も^カ淤^カ母^カ比^カ豆^カ麻^カ阿^カ波^カ礼^カを^カあり^カ○^カ令^カ持^カ此^カ歌^カ而^カゆ^カハ^カ此^カ御^カ
代^カの^カこ^カろ^カハ^カ既^カ尔^カ歌^カを^カ字^カお^カ書^カて^カ贈^カる^カ事^カも^カあ^カめ^カて^カ是^カも^カ
然^カふ^カり^カ又^カ師^カハ^カ御^カ言^カ持^カ宰^カを^カ云^カと^カら^カひ^カあ^カて^カ御^カ哥^カを^カら^カけ^カ
る^カも^カは^カめ^カて^カ行^カて^カ傳^カ申^カ次^カよ^カし^カり^カ書^カら^カる^カ汝^カ持^カふ^カハ^カ非^カ

あ^カ云^カま^カら^カる^カも^カ然^カも^カあ^カる^カ信^カし^カ御^カ言^カ傳^カを^カも^カ持^カゆ^カ云^カ信^カ
き^カなり^カ上^カ卷^カふ^カ献^カ歌^カは^カあ^カは^カも^カ神^カ代^カふ^カれ^カを^カ御^カ言^カ傳^カなり^カ
○^カ返^カ使^カら^カれ^カ尔^カ二^カの^カ解^カあり^カ一^カ尔^カハ^カ加^カ幣^カ志^カ都^カ加^カ波^カ志^カ伎^カ
也^カ訓^カて^カ日^カ下^カ山^カより^カ天^カ皇^カの^カ御^カ使^カ志^カて^カ女^カ王^カの^カ御^カ許^カ尔^カ遣^カ
次^カあり^カ返^カゆ^カハ^カ今^カ出^カて^カ来^カ坐^カ此^カ方^カ牙^カ遣^カは^カふ^カれ^カを^カ云^カめ^カ今^カ
一^カ尔^カハ^カ都^カ加^カ比^カ表^カ加^カ幣^カ志^カ賜^カ伎^カ也^カ訓^カて^カ使^カハ^カ女^カ王^カより^カ天^カ
皇^カの^カ御^カ許^カ尔^カ奉^カ遣^カせ^カる^カ使^カなり^カ其^カハ^カ先^カ此^カ度^カの^カ事^カ天^カ皇^カ未^カ
志^カて^カ日^カ下^カ山^カを^カ越^カ坐^カて^カ其^カあ^カら^カり^カな^カゆ^カら^カ彼^カ御^カ妻^カ向^カの^カ
命^カを^カ傳^カ牙^カ給^カ予^カる^カ尔^カ其^カ御^カ答^カゆ^カて^カ女^カ王^カの^カ御^カ許^カより^カ天^カ
皇^カの^カ来^カ坐^カる^カ處^カ牙^カ使^カを^カして^カ背^カ日^カ
云^カく^カ也^カ令^カ奏^カ賜^カ予^カる^カ其^カ使^カを^カ此^カ御^カ哥^カ
を^カ令^カ持^カて^カ返^カし^カ賜^カふ^カなり^カ此^カ解^カ尔^カ依^カ
也^カき^カハ^カ上^カ件^カの^カ事^カも^カ此^カ趣^カ見^カ信^カし^カ

亦一時天皇遊行。到於美和河

之時。河邊有洗衣童女。其容姿

甚麗。天皇問其童女。汝者誰子。

答。白己名謂引田部赤猪子。爾

令詔者。汝不嫁夫。今將喚而還

坐於宮。故其赤猪子。仰待天皇

之命。既經八十歲。於是赤猪子

以為望命之間。已經多年。姿體

瘦萎。更無所恃。然非顯待情。不

忍於悒。而令持百取之。机代物。

マキ^デ、タテマツリキ^レカルニ^スメラ^ニコト^サキ^ニノリタマヘリ^レコトヲ^バハヤク
參出貢獻。然天皇既忘先所命

ワスラレテ^ソノアカ^キコ^ニトハ^レケラク^イマ^レハ^タレヤ^シオ^ミ
之事。問其赤猪子曰。汝者誰老

ナヅ^ナニス^レヅ^マキツ^ルト^トハ^レケレバ^アカ^キコ^マラ^レケラク^ナ
女何由以參來。爾赤猪子答曰。

ソノト^レノ^ソノツ^キニ^オホ^キミ^ノミ^コト^ヲカ^バフ^リテ^ケフ^マデ^オホ
其年其月。被天皇之命。仰待大

ミ^コト^ヲア^フギ^マチ^テヤ^ソト^セヲ^ヘニ^タリ^イマ^ハカ^ホ
命至于今日。經八十歲。今容姿

ステ^ニオ^イテ^サラ^ニタ^ノミ^ナレ^レカ^ハア^レト^モオ^ノガ^コ、^ロサ^レラ^アラ^ハレ^ラサ^ムト^レテ^コソ^マキ^デ
既者。更無所恃。然顯白己志。以

ツ^レト^マラ^シキ^コ、^ニス^メラ^ミコ^トイ^タク^オト^ロキ^ミテ^アハ^ハヤ^クサ^キノ
參出耳。於是天皇大驚。吾既忘

コトヲ^ワス^レタ^リレ^カル^ニイ^マレ^ミサ^ラニ^ミコ^トヲ^マチ^テイ^タツ^ラニ^ミノ^サカ^リヲ^スク^レ、^コト
先事。然汝守志待命。徒過盛年。

イト^イト^ホシ^トノ^リタ^マヒ^テメ^サハ^クホ^レク^オモ^ホセ^トモ^ソノ^イタ^クオ^イヌ^ルニ^ハカ^リタ^マヒ^テ
是甚愛悲。心裏欲婚。憚其極老。

エ^メサ^ズテ^ミウ^タヲ^タマ^ヒキ^ソノ^ミウ^タミ^三
不得成婚。而賜御歌。其歌曰。美

母呂能伊都加斯賀母登加斯
賀母登由由斯伎加母加志波
良袁登賣又歌曰比氣多能和
加父流須婆良和加父閑爾韋
泥豆麻斯母能淤伊爾祁流加

母爾赤猪子之泣淚悉濕其所
服之丹措袖答其大御歌而歌
曰美母呂爾都父夜多麻加岐
都岐阿麻斯多爾加母余良牟
加微能美夜比登又歌曰父佐

迦延能伊理延能波知須波那
婆知須微能佐加理毘登登母
志岐呂加母爾多祿給其老女
以返遣也故此四歌者志都歌
也

遊行ハ阿蘇婆志都テカヘレヤリタマヒキカレコノヨウタハシツウタ訓修シ中卷白檮原宮段ホ七
媛女遊行於高佐野フドノアソベルタカサノノ類ハニ美和河ハ初瀬
川の流あり美和の事ハ白檮原宮段傳水垣宮段傳二
ホ出ルル万葉十ハ十ハ暮不去河蝦鳴成三和河之清
瀬音平聞師吉毛セトヲトカクシヨレモ○其容姿甚麗ツレカホイトヨカキの訓の云々白檮原宮
段ホ云々傳世のオノカナハ名云々上卷ホ述々藝命の木花
之佐久夜毘賣命ホ誰女タカスガ也同賜子ヲ御答ホ大山津見
神之女名云々也申賜シ中卷ホ應神天皇の宮主矢河
枝比賣ホ汝者誰子カ也同賜子ヲ御答ホ毛丸迹之比布
札能意富美之女名云々也申セ也然ホ此ホハ

お己ソレガ名をのり告申ムスて其之ソレガ女メ忠申ムスはるハ傳ツ牙
 此父コノの名ハ漏モレ其コノなるは傳ツ誰カ子コ也ナリ何ナニも亦モ父コノの
 名を申ムスはるは傳ツ其コノなるは傳ツ又マタ引ヒキ田タ部ベハ大御哥オホミコお比ヒ
 氣ク多タ能ネ其コノ依ヨて訓ツ法ホウ也ナリ和名抄ワナヒナヒ引ヒキ田タ部ベハ讚岐サンシ国クニ大内オホウチ郡ノ
 多タ也ナリ神名帳カミナヒ大和ヤマト國クニ城上シロノ郡ノ小泉コイズミ田タ部ベハ神社ヤシロ也ナリ此地コノ
 因ユる姓ナリ引ヒキ田タ部ベハ又マタ佐渡サツマ國クニ雜太シラタ郡ノ書紀ヤマト天武テンブ卷マキお
 三輪ミヤ引ヒキ田タ部ベ君ミコ難波ナニハ麻呂マロ也ナリ云イハレ人ヒト持統チツ卷マキ引ヒキ田タ部ベ朝臣アソヒ廣目ヒロメ
 引ヒキ田タ部ベ朝臣アソヒ少麻呂シマロ也ナリ云イハレ人ヒト見えミるハ此コノ姓ナリ也ナリ三代實
 錄ミコト五イ十ニ也ナリ大神朝臣オホミカミ良臣ヨシノミ云イハレ大神オホミカミ引ヒキ田タ部ベ朝臣アソヒ等ト遠祖トホノ雖
 同ナリ派ハ別ニ各異ニ云イハレ此コノ大神オホミカミ引ヒキ田タ部ベ朝臣アソヒハ即ソレ加カ三輪ミヤ
 引ヒキ田タ部ベ朝臣アソヒ君ミコ也ナリ此コノ依ヨるは傳ツ

大神朝臣オホミカミの支別ワカレあり。大神朝臣オホミカミの事ハ傳ツ廿三ニの五ノ○
 赤猪アカイノ子コハ赤猪アカイノ由縁ヨリありて起タる名ナリ也ナリ○
 不嫁メカ夫ツハ登都賀受トウツガ豆マメ阿礼アレ也ナリ訓ツ法ホウ也ナリ鎮火祭チヅメ祝詞イハヒ也ナリ妹イモ
 背セ二柱ニツツ嫁ヤメ繼ツギ給タマ豆マメ嫁ヤメ繼ツギ必カナラトツツ和名抄ワナヒナヒ又マタ歸キ驗ケン日本紀ヤマト私
 記シ云イハレ止豆トウツ木キ乎ヲ之レ閉ト止里トシ書紀ヤマト神代カムヤマト卷マキお交マ道チ敏達トモ卷マキ孝
 德トク卷マキお嫁ヤメ又マタ女メ自適ヨリ人ヒト也ナリ也ナリ○
 古言コトコトなり。大加オホカ古言コトコトの漢籍カンシヤク訓ツ法ホウ也ナリ遺ヰ也ナリ○
 其意コトバハ非アラ嫁ヤメ不メカ也ナリ也ナリ○
 也ナリ書キる字ジの如スくいハ也ナリ○
 今將イマ喚メ今イマ今イマ還マり來キむ也ナリ○
 云イハレ今イマなり。俗ソコ也ナリ○
 内ウチ也ナリ云イハレ意イ也ナリ○
 此コノ時トキお直タダ也ナリ○

如此詔するハ、いりた童女なるが故あり。○天皇之命
ハ、御契の如く喚賜お詔命なり。下ふ体も同じ。○仰待
は、万葉の哥も高くお待や多くあるも仰ぐ意、此次お
此、同事を望む書るも其意あり。俗言ハ、頸を長くして
同。○望むも師の阿布岐待都流也、訓もさる宜し。
○多年ハ、許く陀久能登志也、訓も大被詞也、許く太
久乃罪乎也、見衣万葉四、四十、几許雖待五、十八、お許
許陀十四、七、お已許太十七、四、お許已太久母十八、六
お許已太久、お其外幾許也、云々卷々お多し。な
此言の例中、卷白檮原宮段、大御哥も、許紀志也、あり

処お委云々、傳十九の姿體ハ、加本加多知也、訓も
二字を、加本也、訓も、此ハ、瘦萎也、云々、下
容姿既昔也、加本也、訓も、此ハ、瘦萎也、云々、下
ゆ、○瘦萎ハ、夜佐加美加泊氣、阿礼婆也、訓も、氣の
自の假字ハ、遅加、詳も、姑、自也、書紀垂仁、卷、お、亭
名城推姫命、既身、身、瘦弱、以不能祭、天智、卷、お、憂、悴、極
甚、な、お、依、り、○無所、特、ハ、喚、さ、る、修、持、の、な
た、な、め、○不、忍、於、梶、ハ、伊、夫、世、久、互、延、阿、良、自、也、訓、も、
梶、ハ、伊、夫、世、久、也、訓、も、由、其、外、お、訓、も、言、あ、中
卷、明、宮、段、無、梶、也、あり、処、以、委、云、傳、二、の、不、忍、ハ、此
多、前、自、な、也、訓、も、ハ、何、也、か、漢、籍、訓、も、延、阿、良、自、也、ハ
述、く、ま、り、お、古、言、也、お、在、る、也、

訓ふなり。自^レ受^ズるもよむ。修^ル多^ク好^ム也。上^ニは^シ万^葉四^二十^一に^テ黙^シ然^ル得^ズ不^レ在^ル者^ハあ^リる^ハ自^レそ^の如^しき^ハなり。○百^モ取^リ之^ノ机^ト代^シ物^トハ^シ上^ニ卷^ル見^ル也。傳^十○參^ル出^ル小^ノ皇^ノ大^ノ宮^ノ也。○所^レ命^ルハ^シ能^ク理^ス多^ク麻^ノ用^ル理^ス斯^レ也。訓^ル修^ル也。○志^ハハ^シ万^葉五^二十^一と^ス和^ス周^ラ良^シ志^シ奈^ハ牟^カ如^カ○誰^レハ^シ書^ノ紀^ノ繼^ル跡^ト卷^ノ哥^ノハ^シ馱^レ例^ト夜^ノ夫^ノ比^ト等^ト母^ト夜^ノ矢^ノハ^シ助^ル辞^トなり。万^葉ハ^シ○老^ハ母^ハハ^シ游^ル美^ノ那^ノ也。訓^ル信^ルき^コ也。上^ニ卷^ル云^フ也。傳^九○何^レ由^レ以^テハ^シ万^葉廿^一十六^トハ^シ奈^ハ爾^ヲ須^ル礼^ス曾^レ也。何^レに^テ依^テ訓^ル也。今^ハ漢^ノ文^ハハ^シナ^シス。遺^ルハ^シ此^ノ古^ノ言^ノ○其^ノ年^ハ其^ノ月^ハ其^ノ日^ト共^ニハ^シ其^ノ某^ノなり。○被^ルハ^シ万^葉廿^一十五^トハ^シ可^ク之^レ古^ノ伎^ノ夜^ノ美^ノ許^ノ等^ト加^テ絨^ノ布^ノ理^ス我^ノを^テ清^ク也。

可^ク賀^ル布^ノ利^ト也。書^ル也。○至^テ于^テ今^ノ日^ト手^ノ字^ノ諸^ノ本^ハ無^シ今^ノ參^ル出^ル耳^ハ此^ノ耳^ノ字^ハ上^ニ卷^ル云^フ也。登^ル志^ハ互^ニ許^ル曾^レ也。訓^ル也。其^ノ許^ル曾^レ也。不當^ル也。此^ノ事^ハ傳^ル初^ニ卷^ル委^ス云^フ也。○登^ル志^ハ互^ニ許^ル曾^レ也。云^フ也。○古^ノ言^ハハ^シハ^シ驚^ルの^ノ下^ニハ^シ詔^ノ字^ハ若^クハ^シ曰^ク字^ハ也。必^ズあ^リる^ハ也。○守^ル志^ハハ^シ美^ノ佐^ノ袁^ノ也。訓^ル修^ル也。字^ノ書^ル也。所^レ守^ル也。毛^ノ持^ル念^ル也。注^ス也。靈^ノ異^ノ記^ハ風^ノ生^ル也。手^ノ可^ク也。氣^ノ調^ル跡^ト佐^ト乎^トなり。拾^ル遺^ル集^ノ下^ニハ^シ三^ノ瀬^ノ川^ノ渡^ル也。美^ノ佐^ノ袁^ノ也。なり。○盛^ル年^ハハ^シ師^ノの^ノ微^ノ能^ク佐^ル加^テ理^ス也。訓^ル也。○依^ル也。○事^ハ決^ス也。大^ノ御^ノ哥^ノ也。云^フ也。○愛^ル悲^ハハ^シ愛^ル字^ハ本^ハ也。受^ル也。誤^ル也。延^ル佳^ノ本^ハ也。憂^ル也。

し今ハ真福寺伊登富志也訓修し續紀廿四詔不愧自
本^イ依^ホ保^シ弥^ホ奈^ホ母^ホ念^ホ須^ホ此^ホ又^ホ准^ホふる又^ホ同^ホ紀^ホ四^ホの^ホ詔^ホな
弥^ホ伊^ホ等^ホ保^ホ自^ホ弥^ホ奈^ホ母^ホ念^ホ須^ホ此^ホ又^ホ准^ホふる又^ホ同^ホ紀^ホ四^ホの^ホ詔^ホな
シ^ホ今^ホハ^ホ真^ホ福^ホ寺^ホ伊^ホ登^ホ富^ホ志^ホ也^ホ訓^ホ修^ホし^ホ續^ホ紀^ホ廿^ホ四^ホ詔^ホ不^ホ愧^ホ自^ホ
云^ホ毛^ホ即^ホ此^ホ○心^ホ裏^ホ欲^ホ婚^ホハ^ホ心^ホ裏^ホを^ホ上^ホ句^ホ小^ホ属^ホて^ホ訓^ホる^ホハ^ホ已^ホ
言^ホなり^ホ○心^ホ裏^ホ欲^ホ婚^ホハ^ホ心^ホ裏^ホを^ホ上^ホ句^ホ小^ホ属^ホて^ホ訓^ホる^ホハ^ホ已^ホ
く^ホ一^ホ句^ホを^ホ四^ホ字^ホ賣^ホ佐^ホ麻^ホ久^ホ富^ホ志^ホ久^ホ游^ホ母^ホ富^ホ世^ホ母^ホ也^ホ訓^ホ修^ホ
ふ^ホ書^ホる^ホ例^ホあり^ホ賣^ホ佐^ホ麻^ホ久^ホ富^ホ志^ホ久^ホ游^ホ母^ホ富^ホ世^ホ母^ホ也^ホ訓^ホ修^ホ
し^ホは^ホて^ホ此^ホ欲^ホハ^ホ常^ホふ^ホ願^ホ欲^ホふ^ホを^ホ云^ホ也^ホハ^ホ意^ホ異^ホあり^ホて^ホ此^ホハ^ホ
守^ホ志^ホふ^ホ大^ホ命^ホを^ホ待^ホて^ホ嫁^ホぎ^ホら^ホせ^ホて^ホ徒^ホ小^ホ老^ホぬ^ホる^ホこと^ホも^ホ愛^ホ
悲^ホく^ホ所^ホ念^ホて^ホ老^ホ女^ホの^ホ為^ホ一^ホ度^ホ小^ホ婚^ホて^ホ彼^ホが^ホ心^ホを^ホ慰^ホえ^ホま
欲^ホく^ホ所^ホ念^ホ看^ホなり^ホ○極^ホ老^ホハ^ホ伊^ホ多^ホ久^ホ游^ホ伊^ホ奴^ホ流^ホ也^ホ訓^ホ修^ホし^ホ
万^ホ葉^ホ十^ホ一^ホ師^ホハ^ホ極^ホ太^ホを^ホ下^ホバ^ホレ^ホ心^ホ也^ホ訓^ホる^ホ也^ホあり^ホ也^ホ此^ホ訓^ホハ^ホ決
免^ホが^ホし^ホ師^ホハ^ホ極^ホ太^ホを^ホ下^ホバ^ホレ^ホ心^ホ也^ホ訓^ホる^ホ也^ホあり^ホ也^ホ此^ホ訓^ホハ^ホ決

○古事記傳四十一
○三十三
美^ホ牟^ホ呂^ホ也^ホ美^ホ母^ホ呂^ホ又^ホ三^ホ輪^ホ山^ホを^ホ云^ホる^ホ毛^ホ常^ホふ^ホれ^ホ也^ホ然^ホふ
美^ホ牟^ホ呂^ホ也^ホ美^ホ母^ホ呂^ホ又^ホ三^ホ輪^ホ山^ホを^ホ云^ホる^ホ毛^ホ常^ホふ^ホれ^ホ也^ホ然^ホふ
て^ホ毛^ホ河^ホ多^ホ引^ホ田^ホ部^ホ三^ホ輪^ホ小^ホ緑^ホ不^ホ御^ホ室^ホの^ホ事^ホ既^ホ尔^ホ上^ホ
卷^ホ云^ホ傳^ホ十^ホ二^ホの^ホ伊^ホ都^ホ加^ホ斯^ホ賀^ホ母^ホ登^ホハ^ホ嚴^ホ白^ホ禱^ホ之^ホ本^ホ
なり^ホ此^ホ於^ホ八^ホ濁^ホ音^ホあり^ホ也^ホ必^ホ豆^ホ也^ホ書^ホ伊^ホ都^ホ忌^ホ清^ホ免^ホて^ホ齋^ホ
く^ホ意^ホ万^ホ葉^ホ十^ホ一^ホハ^ホ天^ホ飛^ホ也^ホ輕^ホ乃^ホ社^ホ之^ホ齋^ホ禱^ホ云^ホる^ホ意^ホ
嚴^ホ白^ホ禱^ホの^ホも^ホぐ^ホひ^ホなり^ホ書^ホ紀^ホ之^ホ皆^ホ嚴^ホ母^ホ登^ホハ^ホ其^ホ木^ホの
こ^ホ多^ホし^ホ常^ホふ^ホ未^ホ下^ホを^ホ木^ホ

本云云 大被詞云 彼方之繁木本也 何なるや 然るなり
書紀垂仁卷云云 以天照大神鎮座於嚴樞之本
而祠之 此れを倭姫命 世記云倭國伊豆加志本宮也
下なる 万葉一十一 吾瀬子之射立為兼五可新何本
伊豆の豆の清濁疑ハ志 大御哥 伊都や書る 就て
五手船を二処可て 伊豆手船 如くなれ 萬葉世
濁しあふ 此れは 右の二の嚴樞本 其樹の下を
思ひ 潤し 此れは 異なり ○加斯賀母登ハ 白檮之本
即上なる 嚴白檮を重ぬて 詔する 古哥の例なり ○由
由斯伎加母ハ 忌く志を哉なり 上三句ハ 此御句之詔
は 多々 其の序あり 神社の樹を 恐み 忌憚る 由の如く

萬葉四十八 神樹亦毛手者觸云乎 又八十味
酒呼三輪之祝我忌杉手觸之罪欽君二遇難寸七
尔三幣取神之祝我鎮齋杉原燎木伐殆之國手斧所取
奴之小神の樹をバ 恐み 憚る 亦 此の御
哥の意ハ 止小憚其極老也 何る意ホて 甚しく 老する
容貌の憚られ 婚小不忍る 契沖ハ 志を堅
を 勿免賜小なり 用ひ 其をさる 古ハ 非也 後世の用ひ
ハ 由ス 斯く 小言の用ひ 古ハ 非也 後世の用ひ
亦 たり 又 加し 是ら 媛女也 結光賜 乃て 古ハ 由
斯くハ 忌憚ら 其由ハ 次ニ 云 乃て 古ハ 由
あり 此御哥の序の神木 嫌ハ 此れを 憚ら 御
此の如き 此れなり 御

哥の老るる容貌を詔する如きは是
 なり。又長く志すは云々なり。此二つは轉ゆ
 て後ふハ善悪きふりて甚しきをも云り。ゆ
 になや云々。替て云云。悪みて云云。ふ是なり。又伊美斯万
 伎由ス。斯伎言毛意毛通ひて皆同じ。又伊美斯万
 乗二三丁。不挂文忌之伎鴨三五十。不言卷毛奇忌志伎
 可物四十七。不独宿而絶西紐緒忌見跡六十九。不
 毛湯敷有跡又三十。繫卷裳湯石恐十。五十。不
 云忌漆十二。不忌久毛吾者歎鶴鴨十五。不湯
 種薛忌伎美尔故非和多流香母十七。四十。不許登尔
 伊泥底伊波婆由遊思美。○加志波良表登賣本白檮原
 媛女なり。白檮原ハ即上の嚴白檮の生るる処を云て。

御向の意ハ甚く老るる容貌の忌く志く憚らるるこ
 や嚴白檮の如き媛女ハ詔あり。契沖説の如く。由
 を堅く守まらるる不先賜ふやしてハ。此御向又叶は
 其故ハ上の序を取て直又かじはら媛女ハ詔するハ
 即嚴白檮ハ警子て其が如くなる媛女ハ云意あるを
 若く變々意なるふやを贊する由ス。斯云言或ハ白檮
 の色變々常葉なるふやを贊するふ。白檮をゆし
 て加ハ恐み憚る意なるを其又警子て贊てハ。わか
 直又かハはらをやめハ。詔ふ序あり。此は直又か
 の意ハ哥の意ハ異あるハ。常なる序は是ハ直又か
 志はら媛女ハ賜るハ。常なる序の如きハ。意ハ必
 同じか。はらて老嫗を少女とし也。詔するハ。婚ま
 叶ハさるるなり。はらて老嫗を少女とし也。詔するハ。婚ま
 布しく所念看よ就ての御哥ふれをなめ。○此氣多能
 ハ引田之あり。○和加久流須婆良ハ若栗栖原なり。次

此御向の和加久閑を詔ハ多ク其の序あり此老嫗の郷の引田小栗林のあると因て詔可なる傍し此栗樹を多く植生し此地を栗栖云云處々地名も栖ハりけり意あり此木も限りて云云他木も某園某生あやハ云々也未思得文御栖也云物ハあり某栖也云例ハおがえ文田原御栖丹波御栖なる見○和加久閑ハ契仲厚顔抄ハ久字を和加久誤る傍し上の加より訛らきて加々也ありしを和加今ハ本のま契仲云万葉十六云所射鹿半認河邊之和身若可倍尔佐宿之児等波母若き時よなやの意り也云や万葉の和草ハ和の下加字脱し久ハ加也通るるにかよあれり草なる傍し久ハ加也通

音あれハ万葉の若可倍也同言也ハ聞ゆるを其意未思得文同師ハ君久ハ加也の約也云て閑ハ伊尔斯閑年加斯閑也閑なる傍は赤猪子若かり其間也云意也ハ聞ゆ書記齊明卷大御哥歌伊喻之乎都那遇何播杯能倭柯矩娑能倭柯俱阿利岐騰云云○韋泥豆麻斯母能ハ率寢でまし物を有り○淤伊尔都流加母ハ老あける哉なり○赤猪子之泣涙ハかかてて聞え之也云辭穂あす文赤猪子泣而涙云云事な絶あきほき処あり○所服ハ祁勢流惣訓は中卷倭建命段の哥尔和賀祁勢流意須

此能須蘇尔也。あるは考ふは。傳廿八の九葉。○丹措スリは。九葉
 て措衣スリコロモの事ハ。高津宮段ハ。青措衣。あるは。処ハ。委云。傳
 四十葉。六の措字の事也。彼処ハ。云。り。さて。丹措ハ。赤土黄
 土を以て措スリるなり。万葉亦黄土を赤土を波迹
 波迹ハハと云。和名抄ハ。填云。波迹云。ハ。色美。考。く。艶ニホふ。由
 此名。亦。て。光映土の義。亦。や。あ。書紀神代卷。亦。緒ホソ曾
 ハ。赤き。也。あり。ゆ。て。其。色。好。き。土。を。以。て。衣。を。措スる。こ
 也。ハ。万葉一。二十。亦。岸之填。布。尔。仁。宝。播。散。麻。思。乎。六。五。十
 丁。亦。住。吉。能。岸。乃。黄。土。粉。二。宝。比。天。由。香。名。な。也。よ。亦。
 亦。本。布。也。ハ。黄。土。亦。觸。て。衣。ハ。其。色。の。移。り。染。る。を。云。り。

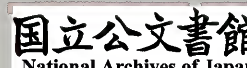
十。卷。日。而。持。居。十五。卷。ハ。秋。芽。子。小。尔。保。蔽。流。吾。裳。云。く。
 相照。し。て。知。ふ。也。同。土。以。て。衣。措スる。と。也。の。所。は。より
 加。く。も。よ。る。ふ。り。○。悉。濕。ハ。登。本。理。互。奴。礼。奴。也。師。の
 訓。也。宜。し。万。葉。二。十。亦。敷。妙。乃。衣。袖。者。通。而。沾。奴。
 也。あり。又。十五。八。丁。亦。和。我。袖。波。多。毛。登。寺。保。里。互。奴。礼。
 奴。寺。母。○。而。歌。二。字。真。福。寺。本。亦。ハ。無。し。○。美。母
 呂。尔。ハ。御。室。亦。あり。○。都。久。夜。多。麻。加。岐。ハ。築。也。玉。垣。な
 也。玉。ハ。亦。免。る。言。なり。加。築。也。云。ハ。土。以。て。築。る。垣
 也。清。音。なり。濁。不。清。り。也。築。也。云。ハ。土。以。て。築。る。垣
 也。今。世。小。所。謂。る。築。地。也。也。云。云。ハ。築。土。古。亦。ハ。神
 社。亦。モ。築。る。垣。あり。け。多。さ。て。此。ハ。二。の。意。也。也。

ハッふは御室の周ナリ小垣を築ふり。今ハッふハ垣を築て御
室の境域トコロを定むるなり。此意なれば御室ハハ。○都岐
阿麻斯ハ築令餘ふり。上ふる句初の意なれば垣を築
竟て其土の餘めしむるを云。契沖が玉垣を築そえてま
云。師も未築はてめを云。也云。也。後の意なれば御室の
境域トコロを程よめ、廣く垣を築て其域トコロの無用イタツラ小餘き
なり。○多尔加母余良牟ハ誰ふかを將依ヨラなり。誰を多
也のみ云ハ。聞ふれぬ如ク誰之也云も同じ。此ハ吾を和
已を於能其を曾此を許也云也同格なり。契沖が多礼
は精シカし加文多何也。此句垣を築譬の方ハ
なく畧ける例ハある文は此句垣を築譬の方ハ

初の意築竟て餘めしむ土をハ何ふかをせむ神の御
垣の料ふれば他不用ふ。後意又なれを
御室の用ふ垣を築しむる域トコロの無用イタツラ小餘きむるをハ何の
場トコロルか也。セ多也云意なる子誰也しセ云はハ哥の意
此方よて云る詞よて。天皇の將婚也契め置賜ひて。神
御室の料よ老極オハテする身ミの。無用イタツラ小餘きむる。今ハ誰ふら
毛依ヨラむ依る。後き方なし也。此意あり。凡て物よ譬乎と
体古の哥ハ其譬の物のうす。此詞也。哥の意を直小云
子詞也を相雜アヒミすて云る。也。万葉な。あ毛常多きを
か。凡て古の譬哥を見らば。此例を知らざれば。詞よ
惑ハしき也。あるなり。此哥も譬の方よていは

何れもをせむやある修すを誰か云依らむや云
 係ハ哥の意の方の詞なり此哥の意契沖の意ハ非な
 實なき心を神の知しえして後ハ依る方なきや
 言と云らば云る心得ぬ説ふ師の玉垣を修きかけ
 する宮人ハ他事よする修きよ非えその築は修るを
 待のみなりや云を已が他心あるまじきや警言より
 云云修きよ非え云ハ文垣を築かけとる宮人ハ他事ふ
 葉云言ふ ○加微能美夜比登ハ此清音 神之宮人ふめ
 叶六文 ○加微能美夜比登ハ此清音 神之宮人ふめ
 此ハ御室の垣を築人を云て自警言とるなり但
 自の身の譬ハ築餘しとる物又ありて築人ふハ非
 係を如此よえらるハ大らふ云るのみふめ
 葉七十一 皇祖神之神宮人云くはて此哥ハ初の御
 哥の返しなりや契沖云め然聞ゆ ○久佐迦延能ハ日
 下江のあり此日下ハ河内なる和泉の大鳥郡なる

二処の内何れなる多詳ありは蓮の殊多かる江
 なる修し万葉四十八丁ふも草香江之入江尔求食蘆鶴
 乃 ○伊理延能波知須ハ入江之蓮あり ○波那婆知須
 ハ花蓮あり契沖云花橘花薄なや云が如し ○微能佐
 加理毘登ハ身の盛人なり師云身之を隔てハ花蓮盛
 や修くくなめや云とるが如し 微能ハ蓮の實の意ハ
 無きなり但し記中草木の實の假字尔美を書文志を
 必微を用ひとるを思系ハ人の身ハ非えして蓮の
 実をてはて盛人や云るもあや多う実の盛や云
 ハいかやや聞ゆ久花蓮ハ和名抄ハ爾雅云其子
 蓮云くやある如くをや実の名なり又波知須や云
 蜂房の實の名あり花のみあり文實をも主や云
 物なれば実の盛やも云修きなりはて実の盛や云て
 盛人や修くけとるなり然修きも人の身ハ微の假



字を用ひし。其ハ未考見されバ定免がみし身
の若加子小。身カモの盛人ハ若フカく壯サカなる人を云。○登
母志岐呂加母ハカモ多カモき哉カモあて。呂ハ助辞ヤスムコトハあり。呂加母の
例中卷明宮段の大御哥カモ云。傳カモ二のカモ一カモ葉カモして此カモ多カモき
ハカモ羨カモき意カモなり。方葉カモふ此カモ言多カモかる中カモ一カモ四カモ丁カモ尔カモ朝カモ毛
吉木人カモ多カモ母亦打山行来跡見良武樹人友師母カモ五カモ二十
尔カモ麻都良河波多麻斯麻能有良尔和可カモ由都流伊毛良
遠美良牟比等能等母斯佐六カモ十八カモ尔カモ嶋隱吾カモ榜来者多
轟倭边上真熊野之船七十九カモ尔カモ妹尔恋余越去者カモ勢能
山之妹尔不恋而有之カモ之カモ衣又吾妹子尔吾恋行者多雲

並居鴨妹与势能山十七カモ二十カモ尔カモ夜麻扶枳能之氣美登
毘久、鷺能許惠乎カモ聞良牟伎美波登母之毛カモ廿カモ四カモ尔カモ
佐伎母利尔由久波多我世登刀布比登乎美流我登毛
之佐毛乃母比毛世受カモ之カモ正カモしくカモらカモやカモ可カモしカモき意
あり。又十七カモ丁カモ四十カモ長哥尔於登能未毛名能未母伎吉底
登母之夫流我祿カモ之カモハカモ羨カモく思カモふカモをカモやカモしカモふカモ云
見カモ休カモて哥の意ハ後の大御哥の云く小答子て吾今か
く年老カモざらカモまカモしカモりカモバカモ誓カモせカモ可カモしカモ物カモをカモやカモしカモ盛カモなる人カモを
らカモやカモらカモるカモなり。其カモ又カモ下カモ江カモ之カモやカモしカモもカモらカモるカモ
ハ若カモ日カモ下カモ大后カモをカモらカモらカモやカモみカモ奉カモせカモるカモらカモ
也カモ云カモ陰カモらカモしカモやカモらカモるカモ意カモハカモあカモらカモじカモけカモをカモ契カモ冲カモ此カモ也カモしカモ
きカモとカモ然カモきカモ意カモ也カモをカモ然カモらカモしカモ意カモハカモ不カモ知カモらカモるカモ也カモ兩方カモをカモか

物て見るはきりや云はハ叶ハ交とてハ哥の意ハ
物遠し是はくらやアしき子是しや云る例を考ふ
故の非^{モノサカ}多禄給ハ若櫻官段少毛如此^{カク}河^カ傳^ハ元^ハの
なり

志都歌上ル

出^ッ傳^元六^の
五^十六^葉

スメラミコトエシヌノミヤニイデマセルトキエシヌガハ

天皇幸行吉野宮之時吉野川

ノホトリニヲトメノアヘルソレカホヨカリキカレコノ

之濱有童女其形姿美麗故婚

ヲトメヲメシテミヤニカヘリマレキノチニサラニマタエシ

是童女而還坐於宮後更亦幸

行吉野之時留其童女之所遇

ヌニイデマセルトキニソノヲトメノアヘリシトコロニトバマリハレテ

於其處立大御吳床而坐其御

ソコニオホミアグララタテソノミアグラニ

吳床彈御琴令爲儻其孃子爾

マシクテミコトヲヒカシテソノヲトメニマヒセシメタマヒキカレ

因其孃子之好儻作御歌其歌

ソノヲトメヨクマヘルニヨリテミウタヨミシタマヘルソノミウ

曰阿具良韋能加微能美豆母

知^チ比^ヒ又^ク許^コ登^ト爾^ニ麻^マ比^ヒ須^ス流^ル袁^ラ美^ミ

那^ナ登^ト許^コ余^ヨ爾^ニ母^モ加^カ母^モ時^{トキ}其^キ婚^{コン}

吉野宮吉野八中卷白檮原宮段不出^{傳十八の其宮八}書紀應神卷二十九^{年冬十月幸吉野宮}是史^ハ

見^ミ延^ノ始^ハ乃^ハ彼^ノ御世^ノ始^ニ造^ラれ^ルは^シ前^ニ

此^ノ御世^ノ有^リし^ル其^ノハ^ハ知^ルか^シ此^ノ地^ハ世^ニ又^ハ勝^スこ^ト

乃^ハ齊^ニ明^ニ紀^スふ^ニ年^ニ作^ル吉野宮^ヲ五年三月^ニ天皇幸^テ吉野^ニ而^シ

肆^シ宴^ス焉^ヲ天武紀^ハ天命^ノ南^ニ別^ス天皇十年冬十月^ニ東宮入^リ吉

野宮^ニ八年五月^ニ幸^テ于^テ吉野宮^ニ持統紀^ハ三年正月^ニ天皇幸^テ

吉野宮^ニ見^レ之^ル此^ノ御世^ノ宮^ニ幸^テ行^クの^ト也^{ナリ}年^々度^々

記^ス之^ル乃^ハ方^ノ葉^ニ一^ト十六^ノ天皇幸^テ于^テ吉野宮^ニ時^ニ御製^ス哥^ヲ

此^ノ天武天皇^ノ也^{ナリ}又^ハ同^ク天皇^ノ三^ニ吉野^ニ之^レ耳^ヲ我^レ嶺^ニ尔^ニ云^フ

佐備世須登芳野川多藝津河内尔高殿乎高知座而云
云此乃八持統天皇の御世なり。六三十一日天平八年夏
六月幸于芳野離宮之時中御宿祢赤太應詔作哥八隅
知之我大王之見給芳野宮者云々反哥自神代芳野宮
尔蟻通高所知者山河乎吉三。此幸の事續十八二十
天平感宝元年五月為幸行芳野離宮之時儲作哥多可
美久良安麻能日嗣等天下志良之賣師家類須賣呂伎
乃可未能美許等能可之古久母波自米多麻比豆多不
刀久母在太米多麻故流美與之努能許乃於保美夜尔
安里我欲比賣之多麻布良之云々反哥伊尔之故乎於

母保須良之母和期於保伎美余思努乃美夜平安里我
欲比賣須尔个御代三々此離宮乎幸行の時比哥也也
集中尔多く見延々也。○吉野川也彼白檮原宮段尔出
万葉一十九尔雖見飽奴吉野乃河之常滑乃絶事無久
復還見牟九十五。古之賢人之遊兼吉野川原雖見不
飽鴨なふ多し。○古童女ハ袁登賣能阿幣流也訓流し
有ハ字のおゝに訓て下文ハ毛童女之所遇也河上
卷尔於笠沙御前遇麗美人也見え若櫻宮段尔到幸大
坂山口之時遇一女大なる形ある類あり。○其童女之所
遇遇字諸本尔過也作る人誤なり今ハ真福寺本尔依

又記中此例の書意ハ非

前度の幸行の時小此童女の行遇奉れり地を云少

○於其處處字諸本小家也作るハ誤あり今ハ真福寺

本小依きり延佳本又留其童女之所過於其家也よみ

景行卷小相道なご見え後の物語書多やあもる

○大御

吳床吳床ハ阿具良也訓修し即御哥小出り中卷明

宮段あも見也傳正三のな小此物の事上卷小胡床也

ある下ふ云り傳十三の○阿具良韋能ハ吳床座之小

て吳床小坐まは云ひが如し○加微能美豆母知ハ

神之御手以なり神也ハ御自詔ふありんて天皇ハ御

自の御うすをも尊みて詔ふと常なり以ハ後小ハ

母豆也云也も古くハ母知又母知豆也云也此事首卷

六十云云万葉六二十小天皇朕宇頭乃御手以搔撫

曾祢宜賜打撫曾祢宜賜○比久許登尔ハ彈琴あて

彈琴應せての意なり○麻比須流意美那ハ儻為女

なり○登許余尔母加母ハ常世も願あり万葉六の

加母小願此登許余ハ人の常不變小存命体を云余ハ

あり傳十二の九葉云云種くの異加て此ハ此嬢

子の形姿也儻也感賞賜ひてあか之所思者也如此

なから常世お何時もでも儂てあれはしと願ひ給ふ
り。ふは非に孃子の命のみを詔ふ母加母は願ひ辞ふ
て万葉四十二お水空往雲尔も欲成高飛鳥尔も欲成
あぢ比類なふ多し。んて願ふ意の加母ハ常お賀母也
ハ清しおろそを契仲此御向を常世お飲なり。仙女な
るあやや怪み思召れる。云八南えぬるおせり。おそり
仙女の事を常世おのみ云てハ南えぬるおせり。おそり
うそおやの意なむハ常世の孃。はて本朝月令お五節
母かおなや云はるは聞えと。はて本朝月令お五節
儂の始を云る説云五節舞者淨御原天皇之所製也相
爾之向前岫之下雲氣忽起疑如高唐神女髮髻應曲而
舞。舞入天賜他人無見。奉袖五變故謂之五節云其歌
日手度綿茂邕度綿左備須茂。江家次第十細注ありと政事
麻岐底手度綿尨備須茂。江家次第十細注ありと政事

要畧廿七。みる河ハ此の御故事を取て作する物也見
海抄なり。又見ぬ。ハ此の御故事を取て作する物也見
えり。備周等可羅多麻手多母等。麻手多母等。何遠等。呼佐
節。舞ハ。天武天皇の造賜する由
ハ。續紀十五の詔お見ゆ。ゆ
上伴の神女。此事ハさふ見文

即幸阿岐豆野而御獵之時。天

皇坐御吳床爾烟咋御腕。即蜻

蛉來咋其烟而飛。訓蜻蛉云於

是作御歌其歌曰美延斯怒能。
袁牟漏賀多氣爾志斯布須登。
多禮曾意富麻幣爾麻袁須夜。
須美斯志和賀淤富岐美能斯。
志麻都登阿具良爾伊麻志斯。

漏多閉能蘇豆岐蘇那布多古。
牟良爾阿牟加岐都岐曾能阿。
牟袁阿岐豆波夜具比加久能。
碁登那爾淤波牟登蘇良美都。
夜麻登能久爾袁阿岐豆志麻。

ト
フ
カレ
ソノトキヨリゾ
ソノ
ヌ
ヲ
アキヅ
ヌトハ
登布。故自其時。號其野。謂阿岐。

イ
ヒ
ケル
豆野也。

即幸ハ上段の同度の事なり。○阿岐豆野ハ吉野の内
おろめ。大和志。在川上。莊西河村。云々。さもある。法
契沖。今下市。云々。なり。云々。ハ
ガ。万葉一十八。御心。吉野。乃國之花。散相秋津。乃野
辺。尔宮。柱太敷。座波云々。六。十。三。芳野之蜻蛉。乃宮者
云々。又。三吉野之秋津。乃川之。十。五。六。丁。尔。魁野之。十二。二
丁。尔。三吉野之蜻蛉。乃小野。尔。な。此。外。あ。も。多。く。見。ゆ。世。後。

の哥。お。か。げ。ろ。ふ。の。小。野。や。よ。む。も。此。野。の。ろ。や。あ。て。其
ハ。後。世。お。蜻。蛉。を。か。げ。ろ。ふ。云。より。誤。れ。る。名。なり。
○御獵之時ハ。美加理。世須登。伎。尔。也。訓。治。し。世。須。ハ。為
賜。お。や。云。む。が。如。し。万。葉。一。十九。尔。神。佐。備。世。須。登。又。二
一。多。日。夜。取。世。須。な。ぶ。多。く。見。ゆ。六。十四。尔。安。見。知
之。和。期。大。王。波。見。芳。野。乃。飽。津。之。小。野。笑。野。上。者。跡。見。居
置。而。御。山。者。射。目。立。渡。朝。獵。尔。十六。履。起。夕。狩。尔。十。里。踏
立。馬。並。而。御。獵。曾。立。為。春。之。茂。野。尔。月。吉。野。離。宮。小。幸。の
時。の。哥。○。蛔。ハ。延。佳。本。お。蟲。也。作。る。ハ。さ。か。し。ら。に。改。免
なり。○。蛔。ハ。延。佳。本。お。蟲。也。作。る。ハ。さ。か。し。ら。に。改。免
蛇。あ。り。書。紀。お。ハ。蛇。也。も。蟲。也。書。れ。り。蛇。也。蟲。也。ハ。
和。名。抄。お。説。文。云。蠱。蠱。人。飛。虫。也。和。名。阿。夫。也。あり。蛔。ハ。

字書ハ見ホされ也皇國ハ古ハ書ナリ予ノ字
ルハ然ル類多シ師云田中亡也同じルハ蛇を
也同じきコト也未考予之著さるるコト也此説の如
くあり也然ル字書を考ふるに因綱因な也同じ
由アレハ亡をト通ハシ書る也や字鏡ハ蛇ハ可我
ハ蛇蟠同奴可我也アレハハ蛇也通ハシ也
ふこ ○腕ハ和名抄ハ陸詞切韻云腕手腕也和名太
無岐一云宇天也見え上卷哥ハ斯路伎多陀牟伎高津
宮段大御哥也斯漏多陀牟岐也又御哥ハ依ラ
ハ多古牟良也也訓治ハ ○蜻蛉ハ書紀神武卷ホ見
えハ和名抄ハ蜻蛉和名加介呂布也河伎
豆也云名ハ拳文ハ古ハ阿伎豆也云ハ後リ也加
加

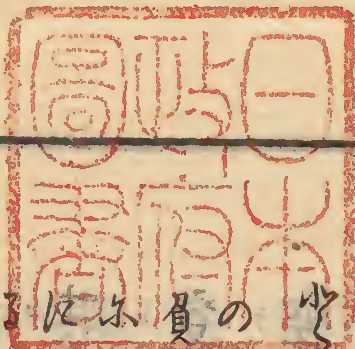
藝呂肥也云ハ蜻蛉玉蜻也借テ書レバそのかみよ
也加牙呂布也云ハ加牙呂布ハ加藝呂肥の
訛也なり或人云今ハ陸奥の仙臺
南部也也ハ阿氣豆也云ハ今世ハ人ハ
也云虫なり此虫ハ種々ありて種々の名あり也
ハモ虫名のか多クハ非也其ハ漢文ハ陽炎也
云哥ハ糸也也云物のコト也此虫名ハ混ハ
蜻蛉の一種殊小細ク小シテ微ナリ云云 ○飛ハ
心得テ哥也然ルハハ誤ナリ ○飛ハ
登備伎也此ハ訓テハ何也カヤ言足ラぬコト也
ハ登備伊尔伎也訓テ書紀ハ將去也何リ ○書紀云四
年秋八月辛卯朔戊申行幸吉野宮庚戌幸于河上小野
命虞人駢獸欲射而待蛇疾飛来嗜天皇臂於是蜻蛉
忽然飛来齧螫將去天皇嘉厥有心詔群臣曰為朕讚蜻

鈴歌賦之群臣莫能敢賦者天皇乃口號曰云く○美延
斯怒能ハ御吉野之なり書紀ハ野磨等能ヤあり○
袁牟漏賀多氣ルハ年の下今一ッ年を重て書る本
音の陀字を書きしれば也此御奇の中此陀字多く
阿皆清音の処なりハ此も然り世不集之癡ヤ云皆
多を濁き也右書紀ハ鳴武羅能陀該你ヤあり大
ハみな清くり記書紀ハ鳴武羅能陀該你ヤあり大
和志ル小牟漏岳在國栖莊小村上方音峯喬聳溪水遠
麓山中有祠也云り是クならよく尋ぬ清し契仲地名
ハ宜し又齊明紀の乎武例我禹坏ル也あるを引て私
記ル小山之上也云るを引て云るハ叶ハ父多氣也
あれを地名なるる也ハ決し夫木集十二ハ御撰次る
を引て私記ル○志斯布須登ハ猪鹿伏ヤなり布須ヤハ隱也在
多

を云はて獵ル就ル猪鹿ノ類凡て志斯也云書紀神
代卷亦獸也然訓也故兄持弟之津弓ハ山○多礼曾
意富麻幣ル誰ぞ大前ハ多礼加カ云云清きを多
礼曾也云ハ万葉十四廿多礼曾許能屋能戸於曾夫
流催馬樂淺水多礼曾古乃名加比止太天く美毛止
乃加太知世宇曾已之止不良比ル久苗也色葉哥も毛
ぞ常なあらり大前ハ天皇ノ御前なり祝詞なり也大前也あり
をフトヘ訓ハ誤あり○麻袁須ス三言ノ御申次
る也此御哥あり知誤○麻袁須ス三言ノ御申次
なり此二句書紀ハ拖例柯能居登飲衰磨陛你麻
鳴須一本以飲衰磨陛你麻鳴須也あり師云此ハ紀ノ方

娛羅^グ休^ラ陀^ニく^ク伺^レ斯^レ不^レ魔^ニ都^ツ登^ト倭^ガ我^ガ伊^イ麻^マ西^シ麼^バ佐^サ謂^キ麻^マ都^ツ登^ト
 倭^ワ我^ガ陀^タ西^シ麼^マ也^ヤ有^リ。佐謂麻都登ハ此也書紀の方勝
 めて^メ聞^ク地^チ。此記なるハあや言足りぬるち次○多^タ古^コ牟^ム
 良^ラ尔^ニハ^ハ手^テ腓^ヒふ^ナり。腕ハ足の腓也同じり手の手の腓
 乃^ノ和^ワ名^ナ抄^シ不^レ陸^{リク}詞^ジ云^ク腓^ヒ脚^{キョウ}腓^ヒ也^ヤ訓^ト古^コ無^ム良^ラ也^ヤ有^リ。説文
 脛^{ウデ}臑^{ノウ}也^ヤ云^ク云^ク臑^{ノウ}字^ジ鏡^{キョウ}也^ヤ躄^ヒ脛^{ウデ}腹^{ハク}也^ヤ古^コ牟^ム良^ラ也^ヤ有^リ書^シ
 紀^キも^モ人^ニ此^{コト}御^{ミコト}句^{コト}陀^タ俱^ク符^フ羅^ラ尔^ニ也^ヤ有^リ○阿^ア牟^ム加^カ岐^キ都^ツ岐^キハ
 蛇^{スナ}搔^{カキ}着^{ツキ}有^リ書^シ紀^キ尔^ニハ^ハ下^カの^ノ岐^キの^ノ下^カ尔^ニ都^ツ也^ヤ云^ク辞^ジ有^リ○
 曾^{ソウ}能^{ノウ}阿^ア牟^ム表^ヒハ^ハ其^{ソノ}蛇^{スナ}を^ヲ有^リ○阿^ア岐^キ豆^ツ波^ハ夜^ヤ具^ク北^キハ^ハ具^クハ
 音^ネなる^ル修^{シユ}き^キ不^レ此^{コト}濁^{ダク}音^ネ字^ジを^ヲ書^クる^ル後^{ノチ}尔^ニ誤^アり^テなる^ル修^{シユ}
 し^シ書^シ紀^キ尔^ニ俱^ク也^ヤ有^リる^ル正^シし^テ師^シハ^ハ俱^クの^ノ誤^アり^テ也^ヤ也^ヤ改^メ

免^メら^レれ^ルし^シり^リ也^ヤ記^キ中^{チュウ}尔^ニハ^ハ俱^ク蜻^{キョウ}蛉^{レイ}速^{ソク}咋^サ有^リ。咋而也而
 在^ゼ假^カ字^ジ不^レ用^ユひ^ヒる^ル例^{レイ}ナ^シ。谷川氏云蜻蛉ふかむし云名あ
 字^ジ添^ソて^テ心^{シン}得^{トク}法^{ホウ}し^シ。勝虫もて此の御哥の意尔
 乃^ノ加^カ久^ク能^{ノウ}基^キ登^トハ^ハ如^{コト}此^{コト}有^リ。基諸本基也有
 乃^ノ方^{ホウ}葉^{エフ}世^セ十^{ジュウ}三^{サン}尔^ニ夜^ヤ麻^マ夫^フ伎^キ乃^ノ花^{ハナ}能^{ノウ}老^{ラウ}香^{カウ}利^リ尔^ニ可^カ久^ク乃^ノ
 其^キ等^ト伎^キ美^ミ乎^ハ見^ミ麻^マ久^ク波^ハ知^チ登^ト世^セ尔^ニ母^モ我^ガ母^モ○那^ナ尔^ニ淤^オ波^ハ牟^ム
 登^トハ^ハ名^ナ小^コ将^{ショウ}負^{オカ}也^ヤ有^リ。登ハ後世小登○蘇^ソ良^ラ美^ミ都^ツハ^ハ虚^ソ
 空^{カラ}見^ミ形^{カタ}有^リ倭^{ヤマト}の^ノ枕^{マク}詞^ジ有^リ上^ウ尔^ニ出^デ傳^{デン}三^{サン}○夜^ヤ麻^マ登^ト能^{ノウ}久^ク
 尔^ニ袁^{エン}ハ^ハ倭^{ヤマト}國^{クニ}を^ヲ有^リ○阿^ア岐^キ豆^ツ志^シ麻^マ登^ト布^フハ^ハ蜻^{キョウ}蛉^{レイ}鳴^ネ也^ヤ云^ク
 乃^ノ伊^イ布^フ有^リ蜻^{キョウ}蛉^{レイ}鳴^ネの^ノ事^{コト}ハ^ハ國^{クニ}號^{ケウ}考^{コウ}小^コ委^イ云^ク少^シ万^{マン}葉^{エフ}一^{イツ}
 尔^ニ尔^ニ怜^{レン}何^{ナニ}國^{クニ}曾^{ソウ}蜻^{キョウ}嶋^{トウ}八^{ハチ}間^{カン}跡^{セキ}能^{ノウ}國^{クニ}者^{シヤ}有^リ多^タく^ク見^ミゆ^ユ



此、倭國の名を已が名不負持て加ふの如く朕不仕
 奉て功を立多て其為不豫て古より倭國を蜻蛉鳴
 云なりゆめ也詔ふれり。其ハ古より此倭國を蜻
 蛉鳴云るやハ今加
 の如く蜻蛉が朕不仕奉て功を立て國名を已が名不
 負むやてのふえそや云も同じく虫名ありさて此ハ實
 然る不は非也也。ましく此虫名の國名も同じき
 因て此虫の功を讚賜ハ多て加ふ取成して詔牙
 の如く是哥さて此五句書紀ハ波賦武志謀飲衰積
 湊休磨都羅符儺我柯陀播於柯武姆岐豆斯麻野麻登
 也。これハ汝が形ハ置多也。あるを思ふ不此地
 意也。聞えとる。結の蜻蛉鳴倭也云るや心得がし
 傳の誤ハ非る。契冲是不の意を云れ也。共不

通えが。一本云くやて細注小奉られこれハ此記也
 き説なり。但し登布ハ登
 全同。伊符也。故自其時云く是よめ以前の
 名ハ河上小野也。云け多書紀不然見有る。今世不
 在也。云地の内なり。以て師云紀ハ此野を今即如也。此名
 け給予る如く記され。ハいか。只此時の事。因
 ておの如く蜻蛉野也。ハ云なり也。云也。此記の
 御哥比趣也。ハ。さ。何。休。書紀の御哥不ハ汝が
 形ハありむ也。あ。此。時。小。書
 殊ハ名け賜予る。不。聞。ゆ。書
 紀云因讚蜻蛉名此地為蜻蛉野

○古事記傳四十一
 ○五十二終

